

町屋ミュージアムにおけるムーブメント

～空堀商店街周辺、谷町六丁目界隈～

石畳の坂道、本瓦葺き、長屋が対面する細い路地で「こんにちは」と声を掛け合う住人たち。大阪には、戦前に建てられた町屋や路地など、伝統ある住空間が残されている地域がいくつかある。既存の長屋を維持するには問題が多く、例えば、現在の建築規制では、路地にしか面していない敷地には新たに建築もできず、老朽化した長屋を解体して更地にしても、建築許可が出ないため空き地になったままになる。入居者がいないままだと老朽化は進む一方だが、空き部屋はなかなか埋まらないという状態である。

そんな中で最近、外部からやってきたアーティストなどが古い家屋を借り、改装して入居するという例が増えてきた。特に、空堀商店街界隈、谷町六丁目あたりでは、貴重な遺産の再生と商店街の活性化を目指してイベントも開催され、住民の意識も変化しつつある。

コラム 空堀の歴史

天正十一(一五八三)年、豊臣秀吉が大坂城築城の際、南面防備のために三の丸の南側に掘った外堀が、今の空堀商店街の東西のラインになる。つまり、ここから北側は大坂城内となり、現在の松屋町筋、谷町筋、上町筋に南向きの門があった。慶長十九(一六一四)年、大坂冬の陣の後、和睦の条件として家康が二の丸まで壊したため、堀もなくなってしまった。今「空堀」という名前だけがその歴史を語る。

空堀の商店街は、明治期末頃、空堀地蔵の定期市を契機に自然発生的に商店街として発展してきた。大正十四年、西賑町に鉄筋二階建ての賑町公設市場が開設され、道路幅が拡張され六メートルとなった。これが現在の空堀商店街の原型であり、商店街や周辺の長屋や路地などは、戦災をまぬがれ、まちの形が現在まで残されている。

1. 倉庫がアトリエになった

たまたま知人が、空堀界隈の長屋を全面改装してアトリエと住いのかねていると聞き、訪ねた。そのアトリエは「香雲」という。地下鉄谷町六丁目駅から徒歩五分の瓦屋町一丁目。空堀商店街からひと筋南へ入った路地にある、築八十年、木造二階建て六軒長屋の中間に位置するこの部屋は十年ほど空家になっていた。もと倉庫で長年の放置により内部が激しく傷んでいたが、木軸や屋根はしっかりしていた。抽象画をはじめインテリアデザインなども制作する知人の香西生子さんは、作業場を兼ねた住まいを都心で探していたが、全面改装でき家賃が安いという条件が気に入り入居を決めた。五年は住み続けるつもりだという。

物件を紹介して実際に改修に携わったのは、マルフジ建築研究所の藤原伸治さんである。古い町屋の空きスペースを有効利用できないかという問題意識をもつ藤原さんは、老朽化する町屋の大家さん(供給側)と借り手(需要側)とで、認識やコストをかけるタイミングにズレがあると言う。つまり、大家さんにとっては、古い物件でそのままでは借り手がいらないからといって、コストをかけてリフォームしても入居者が見つかるかわからず、家賃も必然的に高くせざるをえない(リフォームするにも銀行からお金を貸してもらえない)。また借り手にとっては、自分で改装するのにどの程度コストがかかるかわからないので決

断しにくく、かといって事前に改装された物件は値段が高く、町屋の魅力的な部分が隠されていることが多く、手も加えにくい。需要側と供給側のズレをつなぐ仲介者<トランスレーター>として、藤原さんは以下のように試みた。

借り手に対して…初期に改装のため金銭的投資が必要で、長期居留意識を持つことで初期投資と家賃のバランスが整うことの理解を促す。

家主に対して…人が住めない物件に人が住むために必要な設備への投資と、入居者の初期投資（改装費用）と家賃のバランスのための長期的展望などの理解を得て、コストをかけずに物件を利用、存続することができるメリットを感じてもらう。

特に古い町屋は放置しておくで荒廃が激しく進む。家主にとって、持ち家の老朽化を食い止めることができ、自分はコストをかけず家賃収入を得ることができる。こうして、利用される可能性が薄かった長屋の空き住戸が活用されることになる。藤原さんのグループでは「町屋改装プロジェクト」として、他にも写真アトリエや展示場など、同じ路地界隈での改装に携わっている。

「アトリエ香雲」の各部位は、藤原さんと香西さんとのコラボレーションにより制作された。梁や床板、天井、引き戸、階段など、もとの姿をうまく残しつつ、中央部に開閉式の吹き抜けを設け、屋根裏部屋をロフトにするなど、自然光のさす明るく広がりのある空間になっていた。一階のアトリエは壁や什器を白で統一、作品の色が明瞭に映える仕事場であり、二階は、木のおいが香るあたたかみのあるくつろぎのスペースになっていた。

長屋の前の路地は家主の私道であるが、住民のテリトリーとして、遠慮なく植木鉢が並べられ自転車が置かれていた。小さな地蔵やお稲荷さんもあり、毎年お祭りの日には他の路地からも人が集まってくるという。

<おはなし 路地空間での生活 アーティスト（画家・造形作家）香西生子さん>

私の入居については、両隣の人がとても好意的で気遣ってくれます。路地に住人以外の人があると目を光らせているようで、改装中も、最初は藤原さんなど男性が来たら「あなた、だれや？」と聞いていました。そのうち顔見知りになると差し入れも持ってきてくれました。隣の人がセコムがわりです。路地で会う人とは必ず挨拶しますね。住人が自分の家の前を掃除するし、時々いっしょに焼肉もしています。何となく集まってきて、終わったらさっと帰る。スマートなつきあいです。路地は長屋のプライベートなパブリックスペース。ゴミあさりしていたネコをいっしょに飼ったりして楽しい。砂糖やしょうゆの貸し借りやおすそ分けなどは全くなく、わずらわしさはあまり感じません。安心して快適に仕事ができます。

2. 古い町屋が表現の場になった

空堀商店街界隈で、古い町屋を個人で改装してお店を営業したり教室を開いたりしている所がいくつかあるというので、藤原さんの案内で、まちを散策することにした。

さすが坂のまち。こんなに急な勾配がある商店街が他にあるだろうか。ちょうど上町台地の西端にあたり、昔は、急な崖の西方にすぐ海が迫り夕陽が美しく拝めた場所であった。

その崖の名残で、まちのあちこちに石段や坂道があり、商店街から古い軒が連なるのを見下ろせる。ちょっと横道に逸れると、細い路地がくねくねと折れ曲がり、またもとの太い道に戻ったりしてまるで迷路のようだ。子供のかくれんぼにはうってつけか。奥まった路地長屋住人の表札がまとめて掲げられている「歌舞伎門」を発見。また、もともと「小玉湯」という銭湯であった一階部分を利用したユニークな駐車場もあった。湯船のタイルや天井はほとんどそのまま。二階に所有者が住んでいるらしい。

「RIN」というギャラリーへ。広い戸建ての町屋を改造して、一階部分は弦楽器のギャラリーを兼ねた文化教室。建築家でありクラシックの弦楽器を製作する吉田保夫さんが改装、二階にはその娘さんが暮らし、このギャラリーサロンの運営を行っている。

「音楽を通じた場づくりがしたかった。良質の弦楽器に触れたことのない人は多い。ここでは展示だけでなく実際弾いてもらえるし、貸し出しもします。また楽器をつくる指導もします。例えばギターでも、小さな子供や女性にとって手の大きさにあわないものがほとんど。自分にあった楽器が欲しいという人が遠くからもやってきます。誰でも作ることができますよ。ここで受け付けて近くの工房で指導します。リュート、バイオリン、ギターなど演奏の方も教室も開いており、私が楽器を提供しているプロの演奏家が教えに来てくれています。このギャラリーは、文化教室でもあるし、工房の生徒さんや音楽に興味のある仲間、地域の人たちも集い語り合うサロンにもなります。そのときは少しお酒も出しますね」。古い町屋が好きだという吉田さんは、すぐ近くの長屋を改装して建築事務所と工房を兼ねて活動している。

商店街から少し北へ行くと、「心裸」という陶芸工房に、喫茶（紅茶専門）スリランカ料理（カレー）屋が並ぶ。3軒分を借りて壁を抜いて改装したものだ。借主の岡田昌之さんは、空堀界隈の長屋と路地で育ったが、金融関係に勤務後、以前から興味があった陶芸を仕事に選んだ。倉庫を改装して、陶芸教室を開催、さらに本人が大好きだというセイロン（スリランカ）ティーとスリランカのスライスを使ったカレーの店も隣接して設けた。紅茶は工房で作成されたオリジナルの陶器で味わうことができる。

<おはなし 古い町屋に「気」を入れる 「心裸」オーナー、陶芸家 岡田昌之さん>
「築百年以上の町屋で時間を忘れて陶芸を楽しんでもらい、休憩もしていただくと考えました。最初は自宅で陶芸をしながら商店街で紅茶を販売していたが、倉庫が空いたので大家さんに内部を改装して借してもらえるよう交渉し、ようやく理解を得ることができた。昔からこの界隈で過ごしてきましたが、以前はもっと家が密集していたし、世話焼きでうるさい人が多かったですよ。家が古くなって傷んできてても放置しているところも多く、傷んだままの外観になったり駐車場になってたりしているのは、非常に残念、さみしいです。この独特の伝統的な町並みを守りたいし、朽ち果てそうな町屋には自分が入って「気」を入れていきたい。このまちは子供が消えたまちだから、逆に駄菓子屋を復活させたいし、いつかは「おばんざい屋」もしたいですね。おかげさまで、若いお客さんも増えてきました。商売としては若者に来てほしいけれど、それだけだと地元の高齢の方やもとの商店の人との距離もできてしまう。それで、寄席や地域の集会にも使ってもらいたいと考えているところです」。

大阪の町屋空間で過ごした人、外部から来た人、直接的な理由はさまざまだが、古い町屋を改造した、新しい表現の場がいくつも生まれている。

3. 長屋や路地がアートになった

昨年四月、「からほり倶楽部～空堀商店街界隈長屋再生プロジェクト～」が立ち上がった。空堀商店街周辺の歴史と町並みを見直し、美しいまち並みの形成や保存、長屋の改修（空き住戸の流通）、若いアーティストなど需要への対応などを目的としたものである。古い木造家屋や石畳などがどこに残っているか示した地図の作成や長屋の「物件説明会」なども行い、空き家を持つ長屋の家主と入居希望者との橋渡しも行っている（前述のアトリエ「香雲」や「RIN」は、この活動と関係なく町屋を改造したもので、偶然にも同時並行的に同様の活動が展開されていたことになる）。

からほり倶楽部を運営するのは、建築家である六波羅雅一さん。それまで近くのマンションで暮らしていたが、上階から古い町並みを見下ろしたり歩きまわったりしながら思いを募らせ、生粋の地元住民である「心裸」の岡田昌之さんに相談して活動に踏み切ったという。実際に長屋での居住や出店を希望する若者からボランティアまで、活動に関わる人の数は徐々に増え、現在は170名以上になっている。

そして、11月、からほり倶楽部主宰で「からほりアートイベント」が開催された。長屋や町屋、路地の一面をギャラリーにしたアートの祭である。この空堀界隈の長屋には、陶芸家や写真家、デザイナー、画家、建築家などのアーティストが多く移り住んで、独自で改造した工房やアトリエで創作活動を行っている。この街には新たな創作意欲をかきたてる何かがあると、「アート」をテーマにしたイベントが発案された。空き地や路地、長屋の格子窓などに、写真や絵画、陶芸、オブジェなどの展示が行われ、ライブコンサートが行われた前夜祭を含め2500人の人が地図を片手にまち歩きを楽しんだ。

おはなし アートイベントによる関わり からほり倶楽部代表(六波羅真建築研究所代表)
六波羅雅一さん

私は都市計画やまちづくりの専門ではないのですが、趣味で町屋に興味があって、路地をよく歩き回っていました。昔ながらの町屋をうまく改装してギャラリーやアトリエにしている所もある一方で、崩れそうな長屋や更地のままになっている所もある。長屋の改修を家主さんに申し出ても全く相手にしてくれず、貸してくれと頼んでもいい返事をもらえそうになかったんですね。昔から、雨の日には瓦屋が営業にくるといったように、建物関係の業者が何度も訪ねてきていたようで不信感があったようです。それで、まずは、地域に関わっていくことから始めようと、プロジェクトを立ち上げました。岡田さんや不動産屋さんなど数名からスタートしたのが、だんだん地域内外の参画者が増えて、まちづくりを楽しもうという気運が出てきました。

その中で、イベントによるまちの活性化として「アートイベント」を開催しようという話になりました。実は、富山県八尾市で行われている「坂のまちアートIN八尾」がモデルで、住民自らすすんで、町並みにあわせて建材を使用したり玄関先に鉢植えを置いたり

と、その自発性がすばらしいと感心したんです。それで空堀も、住民の思いを導き出すことが大事ではないかと。でも、地元の方は「こんな汚いまち、どこがええねん」とおっしゃいます。一方、魅力を感じて、若いアーティストが住み始めています。やはり「アート」をテーマにイベントを行うことで、地元の方にはまちに誇りを持ってもらえるし、都心にこんな路地空間が残っていることをアピールできる。それで地元の方に場所を提供してもらい、そこでアートを展示することにしてアーティストの募集をかけました。はじめてのことで、住民の方の許可をいただくのは大変でしたが、実際そこで展示された作品は予想以上に、町並みにあったものに完成していて、驚きました。まちに誘発する力があるのだと実感しましたね。

こんなに大きなイベントにするつもりはなかったけれど、結果として、からほり倶楽部の活動や思いも伝わって、地元の方の意識が少しずつ変わっていると思います。「こんな古い格子も残ってるよ」と嬉しそうに教えてくれたり、まちに対するプラス思考を表に出してくれるようになりましたね。

賑わいが線から面へ広がりそう 空堀通り商店街振興組合理事長 白石重夫さん

空堀の商店街は、昭和四十年頃が一番賑わっていました。戦後都心で焼け残った商店街はここ以外ほとんどなかった。高度経済成長期になると若い人達は郊外へ出てしまい、あちこちに商店街ができ、大型店の進出等、加えて都心のドーナツ化などなど少しずつ衰退化しております。古い商店街で借家のお店も多く、シャッターを閉めても貸す訳にもいかず、何とか対策をと悩んでいるのが現状です。幸い最近、若い人達に人気で有名人もくる飲食店が一、二軒できていい刺激になっています。こういう傾向が続けば、商店街も元気になるのではと思っています。

これまで商店街は、その通りに面した店だけでしたが、最近は外部から来た人達が路地の方まで店を開いたりアトリエを持ったりしています。線から面へ、活動が広がってきた。このまちには、地元の間が気づかないよさがあるのでしょうか。六波羅さん達の動きも、地元にかなり認知されてきました。最近でも二軒ほど、若い人達が町屋を借りるのに立ち会いましたが確実に増えています。若い落語作家が、昭和十年代の生活を体験して本に綴っていくという話もある。からほり倶楽部には、商店街として連携を取り合って、街の活性化をと思っています。

古いまち並は発展の邪魔だと思っていたが、今の感覚とあわせたら魅力が出てくるようですね。南船場や堀江のように、一つの地域としてこの空堀界隈が脚光を浴びて火がつきそうな予感がしています。

4. リニューアルされつつある町屋ミュージアム

古い町屋や路地がもつ独特の歴史的文化的な魅力や価値が、若いアーティストや外部から来た人によって新たに息を吹き込まれることで倍増し、急に注目を集めたことも含めて、地元の間も改めて誇りを持つほどになった。長屋を改装して住むアーティストたちは、ある程度長い期間はこのまちを住処として活動する、つまりまちに根付くことになるだろ

う。一種のアーティストのソーホーとしても発展しそうである。伝統的な空間や独特の近所づきあいが、創造活動を行う環境として、彼らに何らかの影響を与えるに違いない。将来、このまちから世界へはばたく有名アーティストが育つ可能性もある。アーティストに限らず、外部の若者や異文化をもつ人たちが、この長屋と路地のまちに入りこんで、住むことによって、希少価値のある古い町屋の維持が可能になる。文化資源の再生・有効利用が実現するだけでなく、新旧の交流も生まれ、まち自体の雰囲気も少しずつだが確実にリフレッシュするだろう。町屋再生を願い、新旧の仲介を行う仕掛け人たちの存在も大きい。最近では、先例にならって不動産屋が独自で動き、古い空家物件を紹介して入居者を決めることも増えているようだ。そして、新旧の住民と外部の人の協力で実現したアートによるイベントは、第二回目は、商店街も巻き込んで、さらに地域性を生かした内容へと、企画案が練られそうだ。

戦前の大阪の暮らしをそのまま残す町屋や路地、そこで暮らす人々。その博物的な営みや空間は、まさに大阪が誇るミュージアムである。今日的な用途で補修改装を行い、アートを中心とした新住民によって文化発信の拠点にもなり、さらに特別展として、このまちを舞台に一年に一度「からほりアートイベント」が行われる。空堀界限は今、リニューアルされつつある地域ぐるみミュージアムとして、ゆっくりと歩み始めている。

写真キャプション..... 印は必須掲載

* タイトル横 古い町屋が密集する空堀界限（谷町筋ビル屋上より） 撮影：山口量基
あちこちに路地がめぐる

- * 「アトリエ香雲」作業をする香西生子さん
- * 「アトリエ香雲」
- * 「アトリエ香雲」の前の路地
- * 今も石畳の階段が残る
- * 歌舞伎門には、長屋の住人の表札がまとめて掲げられている
- * 銭湯「小玉湯」の1階部分が駐車場になった
- * 「RIN」にて。中央、吉田保夫さん
- * 「心裸」工房にて、岡田昌之さん
- * 「心裸」内
- * 空堀界限にはお風呂屋も多い
- * 六波羅雅一さん
- * 町屋を改造した六波羅真建築研究所内
- * “ (外観)
- * 「からほりアート」より 小さい判 4枚 うち、何枚か
- * 大きい 2 (撮影 川谷清一)
- * 白石重夫 さん
- * 昭和初期の生活が色濃く残る長屋 (撮影 川谷清一)

